アグネス・マーティンのグリッド絵画におけるロスコ受容

芦田彩葵（神戸大学）

アメリカの抽象画家アグネス・マーティン（1912-2004）は、世代としては抽象表現主義の作家たちに近く、抽象表現主義の画家を自認していたが、1950 年代後半から 60 年代にかけて興隆したミニマル・アートの作家であるドナルド・ジャッドやソル・ルウィットたちから注目され、ミニマル・アートの代表的展覧会に出品していることから、美術史上ミニマル・アートの作家として捉えられる傾向がある。彼女の初個展が 1958 年と画家としてのスタートが遅かったことも一因だが、ミニマル・アートの作家たちが抽象表現主義以降の様式展開の可能性を彼女の作品に見出だしたことが主な要因だと考えられる。

マーティンの初期作品《The Spring》（1957）は、構図や色彩において抽象表現主義の画家マーク・ロスコ（1903-1970）の影響が強く窺え、彼女自身も敬愛する画家としてロスコを挙げ、ロスコ作品の意義として作品の内部に生じる空間性について言及している。しかし、ローレンス・アロウェイをはじめ、先行研究では抽象的崇高性を焦点に両者の作品主題について読み解くものはあっても、様式的見地からの受容関係については十分な分析がなされていない。

ロスコは 1950 年頃に確立した、大きなカンヴァスによる平坦な色面の広がりの中に、輪郭をぼかした鮮やかな色彩による 2、3 の矩形が浮遊するロスコ様式と呼ばれる作品群で知られる。先行研究では、色彩や筆触、主題の検証が主眼となり、構図に関する研究が進んでいなかったが、初期の具象絵画から晩年の抽象絵画まで作品様式の変遷を詳細に検証すると、矩形のモティーフを繰り返し回帰させており、矩形の形態について強いこだわりがあったことが分かる。

この矩形に着目すると、マーティンのグリッド絵画が浮上し、その造形性において両者の関連が指摘できる。ロスコ様式とマーティンがグリッド絵画を確立する 1956-1967 年の作品を比較検証すると、手業による直線ではない震えるような輪郭の矩形が画面内で反復されることで生じる画面の拡張性、カンヴァスのフォーマットと画面の矩形による形態の一体化で生まれる作品の全体性、薄塗と曖昧な輪郭の反復による表面の揺らぎによって作品と観者の距離から生じる知覚の変化などの共通性が見出せる。また絵画におけるグリッドは、同一のモジュールが繰り返されることで画面を構造化し統一するが、このグリッドの特質がミニマル・アートに継承されたと推察できる。

このように、矩形を焦点にマーティンの作品様式におけるロスコ受容を考察することで、抽象表現主義とミニマル・アートをつなぐマーティンの特質を明らかにすることができるだろう。そのことは、マーティンを評価していたミニマル・アートの作家たちに継承されたロスコ作品の構造と形態について分析することにつながり、戦後のアメリカ美術におけるロスコの美術史上の位置づけの再考にも発展すると考えている。